

史跡 国泰寺跡 II

平成10年度 発掘調査概要報告

1999.3

北海道厚岸町教育委員会

序

史跡国泰寺跡は、近世東蝦夷地の歴史を伝える道内でも数少ない文化財で、有珠の善光寺、襟似の等澗院とともに特異な歴史的役割を担った寺院として、昭和48年10月29日に国の史跡に指定されました。

昭和60年には、本堂・庫裡・住宅の改築により景観の変化は見たものの、境内はよく当時の佇まいを残しており、観光客による賑わいを見せています。

昭和63年、平成3年には指定地の一部公有化が進み、これを受けて平成4年には「史跡国泰寺跡保存管理計画策定委員会」、平成6年には「史跡国泰寺跡保存整備基本計画策定委員会」を組織し、管理や整備についての基本方針が示されました。

史跡整備に当たっては発掘調査が不可欠ですが、史跡地内の調査は昭和59年に本堂跡の遺構確認調査が行われたのみで整備に関わる調査は今回が初めてのことになります。

今年度の調査は、当時の境内地の範囲と遺構の確認を目的として実施しましたが、幕末から明治期にかけての貴重な資料を得ることができました。今後も境内地の調査を継続することで、国泰寺の歴史的意義を追求するとともに史跡整備を実施していく所存でありますので、一層の御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

おわりに、この事業を実施するうえで、多大な御指導・御助言をいただいた諸機関・諸氏に対して、深く感謝の意を表する次第であります。

平成11年3月

厚岸町教育委員会教育長 小野寺 英樹

例 言

1. 本書は、史跡国泰寺跡保存整備計画に基づく遺構確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、平成10年9月10日から10月6日にかけて実施し、引き続き3月31日まで整理作業を行った。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者	厚岸町教育委員会	教育長	小野寺英樹
事務局		社会教育課長	大野繁嗣
		海事記念館館長	湯浅哲人
		管理指導係長	荒井久和
		文化財係主事	石嶋弘毅
調査担当者		学芸員	熊崎農夫博
調査指導者	釧路市埋蔵文化財調査センター所長補佐 西 幸隆		
調査参加者	教育委員会 岡本 洋、小倉利一、高橋敏晴、米内山法敏、高田紀和、山本正明、岡田早苗、大下義孝、小林 彰、佐藤浩之、諸井 公、三浦博哉、佐藤誉裕、余西弘希、小林吉男、宮原美代子、星野芳範		
作業員	須見伸一、涌井令子、渡辺裕子、沖 綾子		
4. 本書の編集、執筆、図版作成、写真撮影は調査担当者があつた。
5. 調査、整理作業にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。
文化庁、大蔵省北海道財務局釧路財務事務所、北海道教育委員会、北海道教育庁釧路教育局、釧路市埋蔵文化財調査センター、釧路市立博物館
松浦暢道（国泰寺住職）、佐藤有紹（釧路市地域史料室）、遠藤市郎（順不同、敬称略）
6. 調査によって得られた資料、諸記録は厚岸町教育委員会が保管する。

目次

本文目次

I. 調査の目的	2
1. 調査の目的	2
II. 調査の内容	2
1. 地形と現況	2
2. 調査区域と調査方法	2
3. 層位	5

4. 遺構	5
5. 遺物	7

III. まとめ	15
----------	----

図目次

図1 国秦寺の位置	1
図2 国秦寺付近の状況と調査区域	3
図3 調査区	4
図4 遺構配置図及び土層断面図	6
図5 遺物拓影(播鉢・古銭)	9

図6 骨角器実測図	10
図7 厚岸町土地連絡実測原図	16
図8 厚岸郡役所	17
図9 厚岸裁判所	17

表目次

表1 出土遺物一覧	8
表2 出土銭貨一覧	8

表3 陶磁器類観察表	10
------------	----

写真目次

写真1 陶磁器類(碗・猪口・蓋)	11
写真2 陶磁器類(皿・徳利・壺)	12
写真3 陶磁器類(播鉢)	13
写真4 古銭・金属製品・骨角器	14
写真5 国秦寺境内(大正初?)	15
写真6 調査前状況(北側より)	18
写真7 調査前状況(境内より)	18
写真8 調査風景1	19
写真9 調査風景2	19
写真10 調査状況1	20
写真11 調査状況2	20
写真12 溝状遺構検出状況	21

写真13 溝状遺構調査状況	21
写真14 溝状遺構土層断面1	21
写真15 溝状遺構土層断面2	21
写真16 溝状遺構土層断面3	21
写真17 土層断面	22
写真18 地下式遺構検出状況	22
写真19 骨角器出土状況	23
写真20 古銭出土状況	23
写真21 完掘状況	23

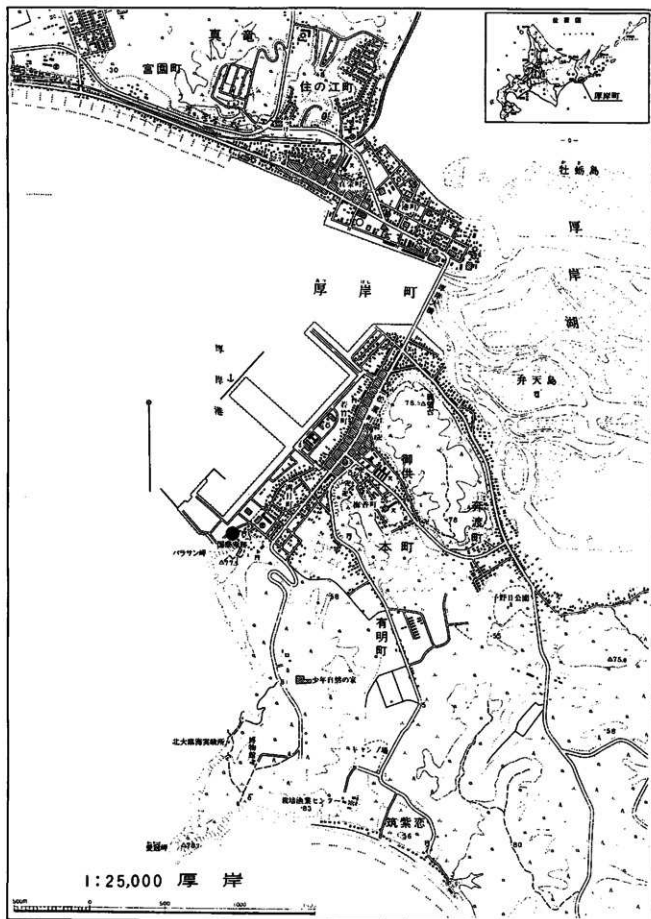


図1 国泰寺の位置

I. 調査の目的

1. 調査の目的

史跡「国泰寺跡」は、厚岸町湾月町1丁目に所在し、昭和48年10月29日に国の史跡に指定された。その後、老朽化した本堂・庫裡の改築工事の決定を機に、かつての国泰寺の位置を明らかにするための発掘調査が昭和59年9月5日から9月21日にかけて行われ、約500点の遺物と礎石及び配石遺構が検出された。

昭和63年及び平成3年には、史跡地の一部公有地化が行われ、それに伴って史跡国泰寺跡保存管理計画が平成4、5年に策定された。引き続き平成6、7年には、保存整備基本計画が策定され、史跡地の整備方針が定まった。

整備を進めるに当たって、遺構確認及び範囲確認調査が必要であるとの見解がこれらの報告書で出されており、公有地部分の先行整備を行うことに先立ち、史跡の現状変更の許可を得て当該地の遺構及び範囲確認調査を実施することとなった。

II. 調査の内容

1. 地形と現況

国泰寺は、海拔80m前後の台地からなる根室段丘を切刻して形成された沢の開口部にあり、沢の上部より流入した土砂が堆積した低地面に位置している。

境内は標高3～4m前後の低地平坦面と沢側に約1mの段差を持つ標高5～7m前後の平坦面の二面からなっており、後者には現本堂・庫裡が建てられている。前者は創建以降の本堂が建て替えられたとみられる場所で、昭和59年の発掘調査で配石遺構や礎石が確認されている。

今回の調査区域は、現境内地の北東側に隣接する標高2～3mの平坦地であり、南西側は側溝によって境内地と区切られ、北東側は町道湾月町横1の通りに面している。戦前より住宅や漁業干場として利用されており、道路整備とともに人為的に土砂が搬入されているが、本来は標高2m前後の平坦面であったとみられる。

2. 調査区域と調査方法

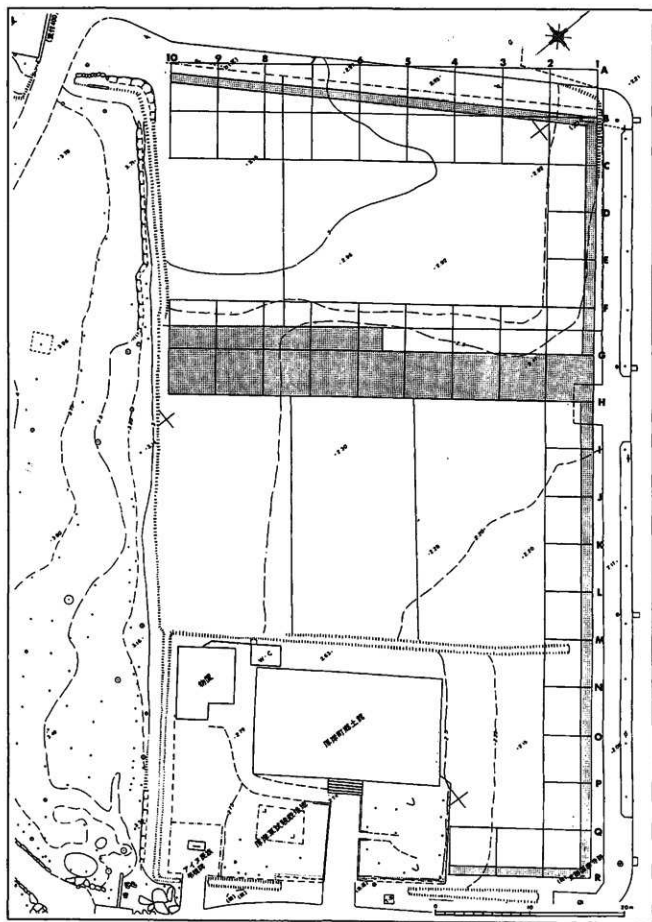


図3 調査区

当該地区は、戦前より近年まで部分的に民家が建てられていたり、漁業干場として使用されていたことが明らかであり、当初よりかなり攪乱を受けていると予想されていたので、短期間の調査でもあり遺構の残存の可能性の高いF1～F10、G1～G10グリッドを中心として調査を行った。

また今後植栽等が予想される道路縁辺部については、B1～B10ライン方向に1m×40m、B1～R1ライン方向に1m×75m、R1～R3ライン方向に1m×15mのトレンチを設定して遺構の残存の可能性を追求することとした。

調査区の表面は、前述の漁業干場の大小の礫に覆われていたので、重機により上面を剥取し、トレンチ部分についても攪乱が著しかったので、重機による攪乱部分の除去を行った。

発掘調査直前の降雨及び台風の通過により沢水の流入に悩まされ、その除去に多くの日数を要し一部調査ができない部分もあったが、最終的な調査面積は約340㎡であった。

遺構及び遺物については、1/20の図面に出土位置、レベル、種別等を記録し取り上げた。表土及び攪乱部分の遺物はグリッドごと一括して取り上げた。

写真撮影は、主要な遺構・遺物、調査状況、遺跡風景等をモノクローム、カラー、リバーサルフィルムにて適宜実施した。

遺構確認後、重機により埋め戻しを行った。

3. 層位

調査区域内における層序は、人為的攪乱が多く各区により一定ではなかったもので、ここではF1～F9グリッド及びG1～G9グリッドの基本的な層序について概説する(図4)。

図示したようにG2～G4ラインでは、表土層として小礫を含む灰褐色土が20～30cmの厚さで堆積している。これは戦前からの整地による二次堆積土である。

その下層に小礫・カキ殻混じりの暗褐色土(I層)が5cm程度堆積しており、これが本来の地表面である。その次に5～10cmの厚さで小礫、炭化物、カキ殻混じりの黒褐色土(II層)があり、その次に火山灰混じりの赤褐色土(III層)が10～15cmの厚さで堆積している。G5～G6グリッドにおいても同様の層序であるが、表土は灰褐色粘質土や黄褐色土に小礫が混入しており、G7～G8グリッドにかけてはI層の下面に小礫混じりの青灰色粘質土が見受けられた。

各トレンチについては、戦前から民家が建っていたこともあり60～80cmの深さまで攪乱が及んでおり基本的層序の確認ができなかった。

4. 遺構

今回の調査では、国泰寺に直接関わる遺構は検出されなかったが、G1～G9グリッドにかけて長さ約30m、幅0.8～1.5m、深さ30～35cmの溝状遺構を確認した(図4)。

この区画は明治44年の土地連絡図(図7)によれば、幅4間の道路敷となっている部分であり、道路の側溝として利用されたものと思われる。溝の底部中央には長さ1～2m、厚さ20～30cmの角材及び自然木が溝に沿って入れられており、暗渠として利用されていたものと思われる。路盤は側溝方向に緩やかに傾斜しており、雨水等の排水に配慮していることが窺われた。

もう一方の溝については、G1ラインの断面では確認できたが、平面での確認にはいたらなかったが、溝はいずれも火山灰層を切って掘られており、溝底部の遺物より明治期に掘られたものと推

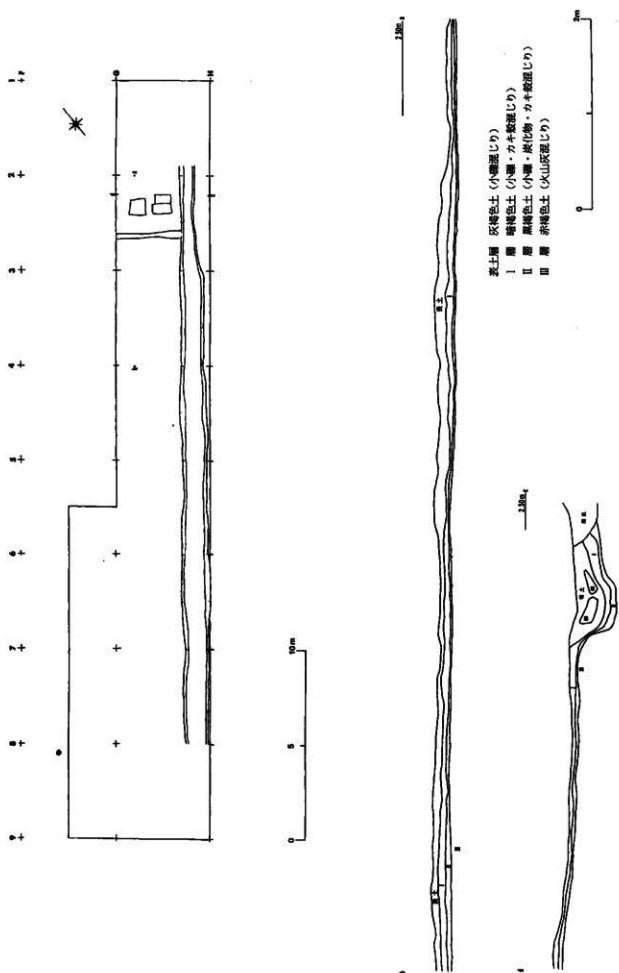


図4 遺構配置図及び土層断面図

測される。

この他にG2グリッドにおいて長さ1m、幅1m、深さ24cmの方形板囲いの地下式遺構1と長さ90cm、幅90cm、深さ21cmの方形板囲いの地下式遺構2及び長さ3.4m、幅50cm、深さ7cmの小溝状遺構を確認した。地下式遺構はいずれも厚さ1cm程の板材で囲われた箱状のものであり、性格は不明であるが遺物より明治期以降の可能性が高い。

5. 遺物

今年度の調査で出土した遺物は4,374点であり、陶磁器類、古銭、金属製品、ガラス製品、木製品、石製品、骨角器、動物遺体等であるが、その8割近くが陶磁器類であった(表1)。

陶磁器類には、碗・皿・徳利・猪口・湯呑み・急須・鉢・播鉢・甕などがある。いずれも細かく破砕されており完形のは少なかったが、大部分は近・現代のものである。近世と思われるものの中で、碗は染付磁器の飯茶碗が十数個体出土している(表3、写真1)。口径は9.2~11.7cm、高台径3.3~5.0cm、高さ4.1~6.3cmのもので、瀬戸・美濃系と肥前系が出土している。皿は小・中・大各サイズがある(写真2)。1は口径13.5cm、高台径7.0cm、高さ2.9cmの染付皿で見込の五弁花文より肥前系のものである。徳利は通い徳利と畑徳利が出土している。通い徳利は頸部より9個体あるが完形になるものは少なかった(写真2、3)。写真3-1はは胴部に草花文が呉須で描かれているが底部が欠損している。甕は大小十数個体出土しており、鉄軸や軸垂れのあるものがある(写真3)。猪口(写真2-11、12)・湯呑み・急須はいずれも破片である。播鉢は破片が約100点出土しているが、陶器で鉄軸が掛けられ櫛描きは密なものが多い(図5、写真3)。その他に土瓶・段重・盃が出土しているが破片である。

金属製品には鉄製品と銅製品が出土している。鉄製品(写真4)には、釘、鋸、鉄鍋の破片等がある。釘は角釘、船釘、丸釘があり、角釘は2~12cmのものが約80点、船釘は7~14cmのものが約40点出土している。鋸は長さ8~15cm、幅2.5~2.7cm、断面長方形のものが6点出土している。鉄鍋の破片は約40点出土しているがいずれも小破片である。銅製品はボタン、ランプの部品、小鈎等であり明治以降のものと思われる。

古銭は、寛永通宝が8枚と10銭銀貨1枚、半銭銅貨1枚が出土している(表2、図5)。寛永通宝は1枚が鉄銭で他は銅銭であるが、錆化・磨耗しているものが多い。10銭銀貨は明治24年、半銭銅貨は明治17年の鑄造である。

ガラス製品は、ビール瓶、ワイン瓶、一升瓶等の瓶類が大半を占めている。中でもビール瓶が多く底部は揚げ底のものが多い(写真4)。

骨角器は3点が出土している(図6、写真4)。1は中柄で長さ11.6cm、幅1.1cm、2は筒状で長さ8.4cm、幅1.0cmである。3は牙製垂飾で長さ7.5cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、中央に直径6mmの穴が穿たれている。その他切痕のある鹿角も数点出土している。

動物遺体ではシカが多く、イヌやその他の小動物の骨がⅡ層から多く出土している(表1)。

以上が遺物の概略である。

	I 層	II 層	表 採	合 計	備 考
陶 磁 器	2,025	894	445	3,364	陶器、磁器、土製品
金 属 製 品	205	75	22	302	古銭、鉄製品、銅製品
ガラス製品	270	36	82	388	ビール瓶
木 製 品	39	18	10	67	
石 製 品	1	1	0	2	
骨 角 器	2	1	0	3	
動物依存体	81	149	6	236	獣骨、鹿角
そ の 他	4	6	2	12	
合 計	2,627	1,180	567	4,374	

表 1 出土遺物一覧

銭 貨 名	鑄造期間	時代	グリッド	I 層	II 層	備 考
寛永通宝	1636～1869	江戸	G 1		1	鉄銭、錆化
寛永通宝	1636～1869	江戸	G 3		2	
寛永通宝	1636～1869	江戸	G 4	1		半折
寛永通宝	1636～1869	江戸	G 5	1		
寛永通宝	1636～1869	江戸	G 7	2	1	錆化、磨耗
竜10銭銀貨	明 6～明39	明治	G 4		1	錆化、明治24年
半銭銅貨	明 6～明39	明治	G 3	1		明治17年

表 2 出土銭貨一覧

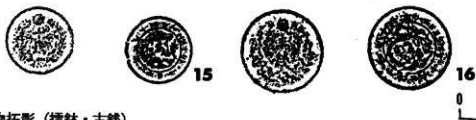
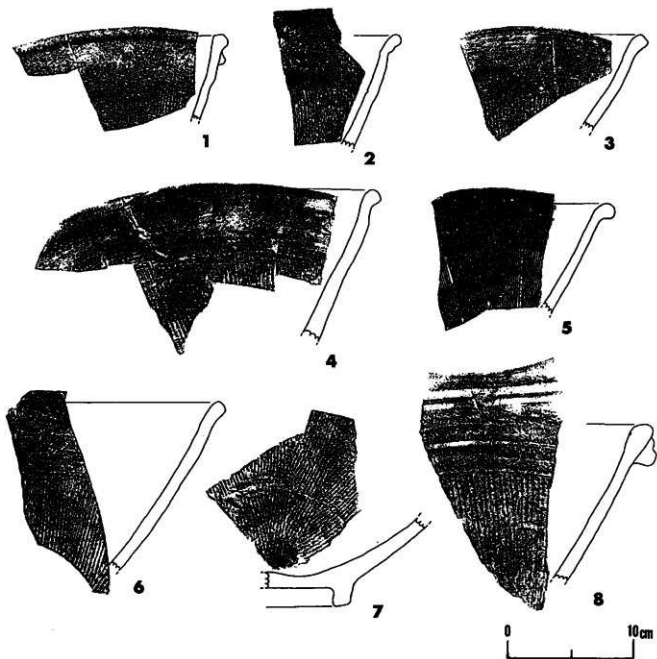


图5 遺物拓影 (插鉢・古銭)

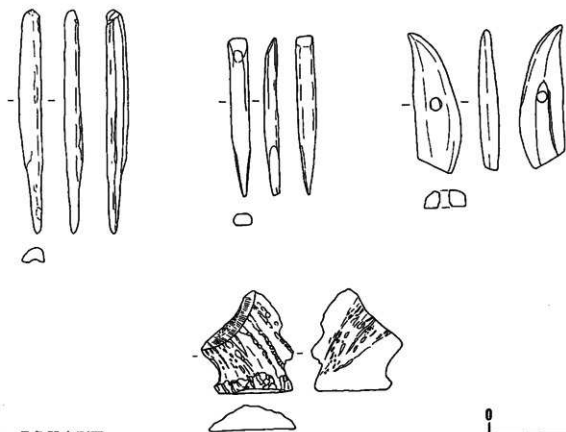


図6 骨角器実測図

図版	番号	種別	器種	口径	高台径	高さ	備	考
写真1	1	磁器	碗	9.2	3.3	4.5	格子文	
"	2	"	"	10.5	4.5	6.0	葉文	
"	3	"	"	-	4.6	6.3	格子文	
"	4	"	"	(9.8)	3.8	5.9	見込「寿」	
"	5	"	"	(10.9)	4.5	5.3	草花文、見込「成化年制」	
"	6	"	"	(10.8)	4.2	5.9	内口縁「雷文」、見込「松竹梅」	
"	7	"	"	(9.2)	(3.6)	4.9	草花文	
"	8	"	"	(9.5)	(5.0)	5.0		
"	9	"	"	(9.1)	3.9	4.8	寿文字、梅花	
"	10	"	"	(11.7)	(3.8)	5.5	竹文	
"	11	"	猪口	(6.7)	(3.9)	5.0	草花文	
"	12	"	"	-	(3.9)	4.9	草花文	
"	13	"	碗	(7.6)	(4.0)	4.1	文字文	
"	14	"	蓋	9.2	3.5	2.8	草花文、男山、内口縁「雷文」	
"	15	"	"	(11.3)	4.4	3.0	人物文、高台内「大明年製」	
写真2	1	"	皿	(13.5)	(7.0)	2.9	見込「五弁花」、肥前系	
"	2	"	"	(10.7)	6.0	2.3	高台内「成化年制」	
"	3	"	"	10.1	5.1	2.6	端反皿、見込「龍」、白磁	
"	4	"	"	7.5	4.0	2.5	角皿	
"	5	"	"	9.8	5.4	2.6	蛸唐草、見込「梅花」	
"	6	"	"	(23.0)	(18.0)	3.2	大皿	
"	7	"	"	-	(16.3)	-	大皿	

表3 陶磁器類観察表

()は推定径、単位cm

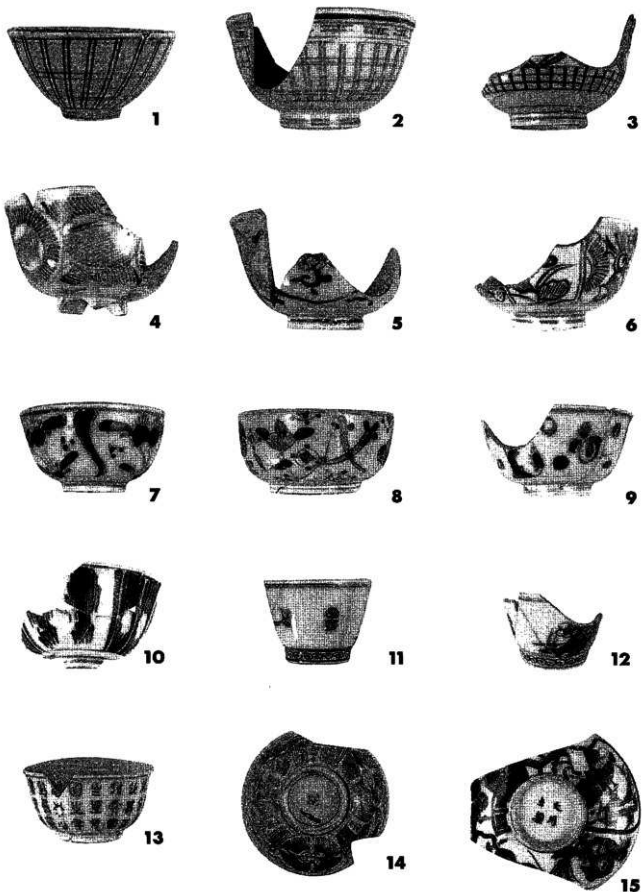


写真1 陶磁器類 (碗・猪口・蓋)

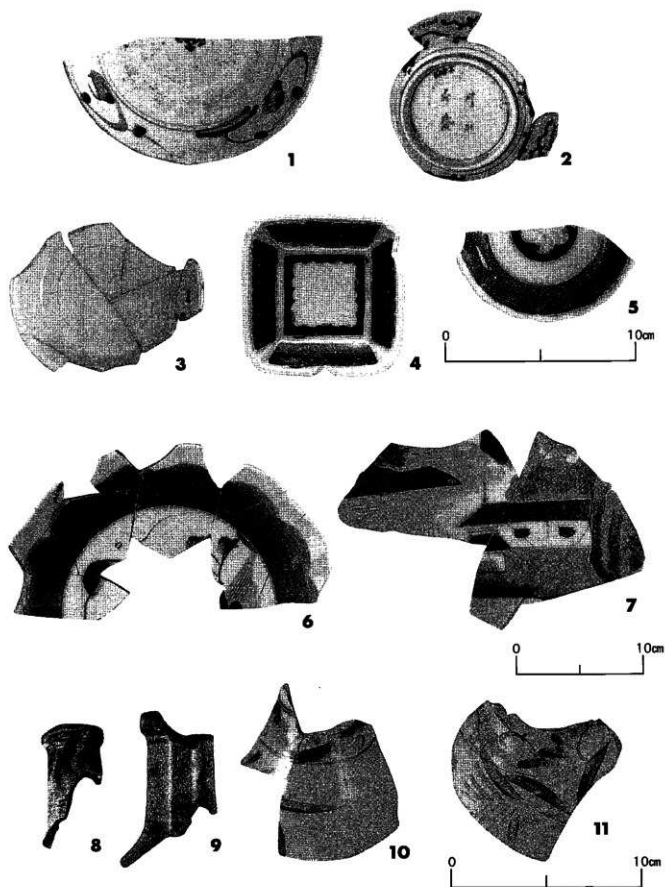


写真2 陶磁器類 (皿・徳利)

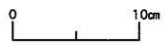
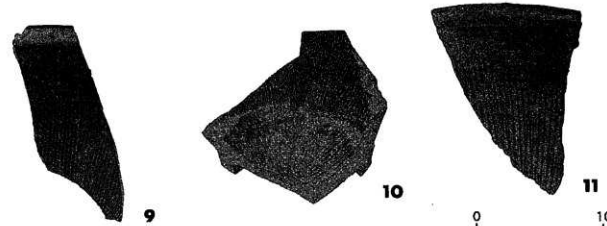
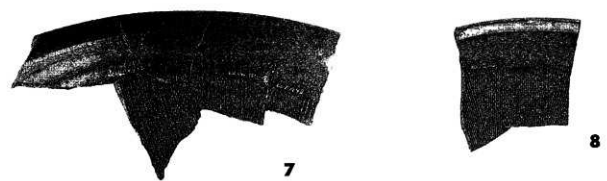
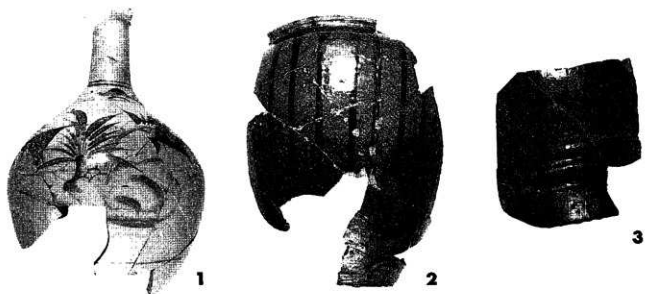


写真3 陶磁器類 (德利・甕・措鉢)

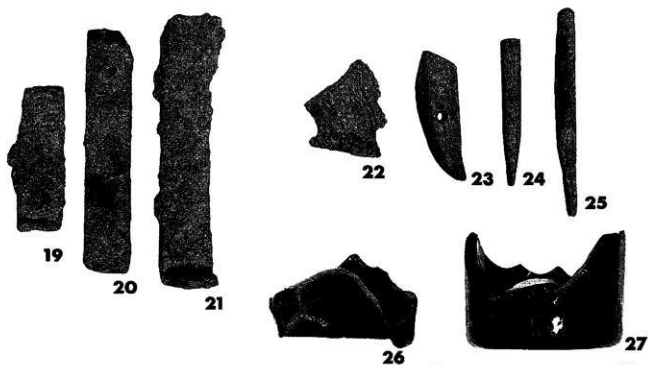
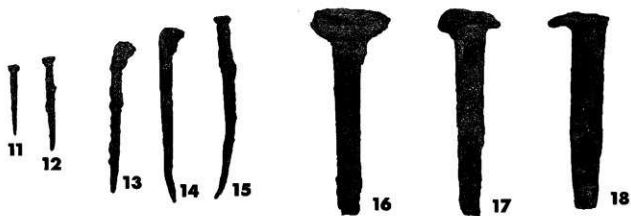
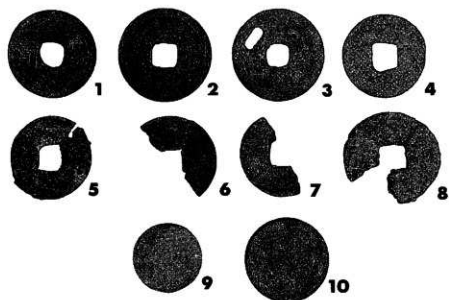


写真4 古銭・金属製品・骨角器



Ⅲ.まとめ

今回の調査は国泰寺境内の範囲確認及び遺構確認を主目的として実施したが、直接国泰寺に関わる門や板塀などの遺構は確認されなかった。しかし、明治期の所産と考えられる溝状遺構の検出や当初の予想を遙に上回る遺物が出土し、国泰寺の周辺を含めた土地利用や当時の生活の一端が明らかにされることとなった。

溝状遺構については、火山灰層の分析等今後も境内地内の調査を継続して時期、性格を明らかにしていかなければならないが、前述のように明治44年の土地連絡実測原図(図7)には、道路幅と同時に道路を挟んで司法省用地(現湾月町1丁目12-1,2)、北海道庁用地(同13-1,2,3)、司法省用地厚岸裁判所敷地(現厚岸水産高校敷地)の記載が見られる。また、明治23年発行の『北海立志図録』でも、厚岸郡役所(図8)や厚岸裁判所(図9)などの官公署や商家の様子とともに道路の側溝が描かれており、明治時代の土地利用の状況を垣間見ることができる。

今回出土した陶磁器類については、混入や伝世品の可能性も考慮しなければならないが、近世・近代のものも多く器種も多様であった。肥前系や瀬戸・美濃系の碗や皿が見受けられたが、今後の調査で出土する遺物とともに年代や産地の同定を行わなければならない。また、骨角器や金属製品、獣骨などの遺物についても今後詳細な分析が必要である。

国泰寺周辺には、創建当時会所(運上屋)や南部藩勤番所があり、幕末には仙台藩出張陣屋も設置されている。これらについては残存する各絵図面や国泰寺に伝わる『日鑑記』によって当時の状況を把握することができるが、日鑑記の記述は文久3年で終わっており、幕末から明治期に於ける国泰寺周辺についてのまとまった資料は少ない。よって前回の本堂確認調査の資料はもとより、今回得られた資料や今後の調査の結果と残存する史料を総合的に検討することにより、この空白期間を埋めていくことが国泰寺の歴史的作用を理解するためにも必要不可欠なものと考えられる。

今回の調査では、残念ながら境内の広がりを確認することはできなかったが、境内地の海側部分の調査を継続して行い、門や板塀及び仏舎利塔の位置を特定していかなければならない。

国泰寺については、日鑑記の解読によりある程度の解明はなされているが、まだまだ資料や情報の蓄積が不足しているため、史跡国泰寺跡を歴史公園として活用するためには、国泰寺の継続調査はもとより周辺の会所や陣屋についても各方面の研究者等との情報交換の活発化が求められている。いずれにしても国泰寺の歴史研究は緒についたばかりである。



写真5 国泰寺境内(北大附属図書館蔵)

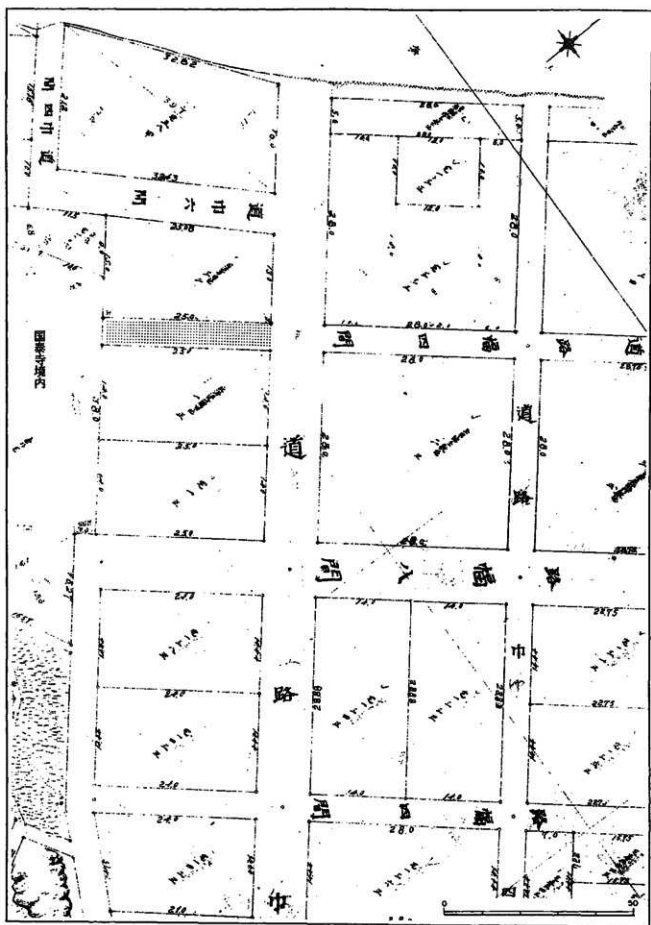


図7 厚岸町土地連絡実測原図（明治44年；一部加筆）

厚 岸 郡 役 所



図8 厚岸郡役所（北海志図録所収）

厚 岸 裁 判 所



図9 厚岸裁判所（北海志図録所収）

引用・参考文献

- 1890 高崎龍太郎著『北海志図録』北島社
 1975 厚岸町史編纂委員会編『厚岸町史』上巻 厚岸町
 1981 松下互他「黙知産三平皿について」『北海道開拓記念館研究年報』第9号 北海道開拓記念館
 1984 佐藤一夫・宮夫婿編著『タノコブ』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
 1984 浜益村教育委員会編『荘内藩ハママシケ陣屋跡の調査』浜益村教育委員会
 1984 金子浩昌著『貝塚の獣骨の知識』東京美術
 1985 西 幸隆・松田猛編著『史跡 国泰寺跡』厚岸町教育委員会
 1985 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅲ』白老町教育委員会
 1986 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅳ』白老町教育委員会
 1987 佐藤一夫編著『弁天貝塚Ⅰ』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
 1988 佐藤一夫編著『弁天貝塚Ⅱ』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
 1989～1993 宮 宏明他『大川遺跡発掘調査概報Ⅰ～Ⅳ』余市町教育委員会
 1990 函館市教育委員会編『特別史跡 五稜郭 箱館奉行所跡発掘調査報告書』函館市教育委員会
 1992 北海道大学附属図書館編『明治大正期の北海道（写真編）』北海道大学図書刊行会
 1992 松前町教育委員会編『史跡 福山城 IX』松前町教育委員会
 1994 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡保存管理計画策定事業報告書』厚岸町教育委員会
 1996 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡保存整備基本計画報告書』厚岸町教育委員会
 1996 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡環境整備事業報告書』白老町教育委員会
 1998 宇田川洋・豊原照司著『元村遺跡』標茶町教育委員会

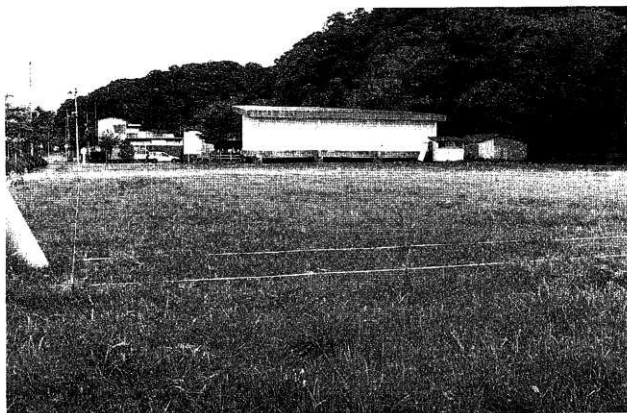


写真6 調査前状況（北側より）



写真7 調査前状況（国泰寺境内より）



写真8 調査風景1

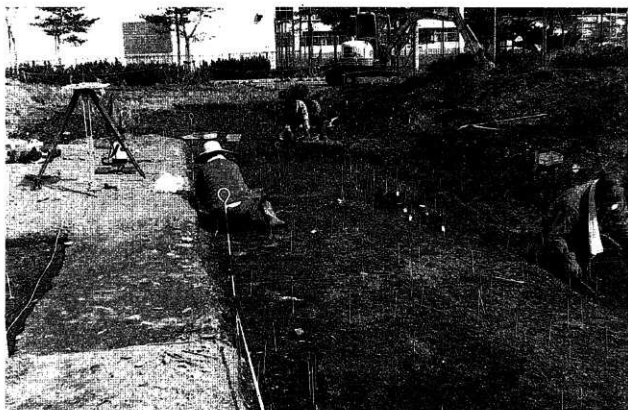


写真9 調査風景2



写真10 調査状況1



写真11 調査状況2



写真12 溝状遺溝検出状況 (北東側より)



写真14 溝状遺溝土層断面 (G2~H2ライン)



写真15 溝状遺溝土層断面 (G4~H4ライン)



写真13 溝状遺溝調査状況



写真16 溝状遺溝土層断面 (G3~H3ライン)



写真17 土層断面 (G1グリッド)



写真18 地下式遺溝検出状況 (G2グリッド)



写真19 骨角器出土状況



写真20 古銭出土状況



写真21 完掘状況 (南西側より)

報告書抄録

書名	くわいじ 史跡 国泰寺跡 II
副題	平成10年度発掘調査概要報告
編著者名	熊崎農夫博
発行機関	北海道厚岸町教育委員会
所在地	北海道厚岸郡厚岸町字真栄町1条2番地1
発行年月日	1999年3月31日

遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くわいじ 史跡 国泰寺跡	くわいじ 厚岸町 湾月町1丁目 12-1・2, 13-1, 14-1, 94番地	M-03	74	43° 01'	140° 50'	1998年 9月10日 ～ 10月6日	340㎡	遺構確認調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国泰寺跡	史跡 寺院跡	江戸後期 近代	溝状遺構 地下式遺構	陶磁器 金属製品 ガラス製品 木製品 石製品 骨角器 獣骨	

史跡 国泰寺跡Ⅱ

平成10年度

発掘調査概要報告

発行 平成11年3月31日

発行者 北海道厚岸町教育委員会

印刷 有限会社 厚岸印刷